

令和元年 8月 11日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880122

氏名 内藤 真帆

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

- 派遣先: 都市名 ボン (国名 ドイツ)
- 研究課題名 (和文) : グスタフ・マーラーの中期作品における管弦楽法の特徴とその変遷
- 派遣期間: 平成30年7月30日 ~ 令和元年7月18日 ( 354日間)
- 受入機関名・部局名: ボン大学・哲学部
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ボン大学では、マーラーの中期の交響曲を対象とし、自筆総譜や作曲者の手による書き込みを含む筆写総譜などの一次資料の綿密な分析をつうじた管弦楽法の特徴とその変遷にかんする研究を行いつつ、受入教授である Tobias Janz 教授のコロキウムに定期的に参加するなどし、研究にまつわるアドバイスをいただいた。以下、同地で行った研究内容と研究状況を記す。

①マーラーの中期作品の一つである「第4交響曲」が、その自筆総譜成立後に演奏や出版の機会に応じて作曲家自身により断続的に幾度も手を加えられていることに着目し、その変化の過程を明らかにすることを試みた。本研究はすでに修士時代に着手していたものだが、19世紀の管弦楽法分野に詳しい Janz 教授との議論を通じ、研究内容が一層洗練された。

②上述の研究を進めるうちに、マーラーの初期交響曲、とりわけ「第1交響曲」と「第2交響曲」の管弦楽法が、それらの初版出版までの幾度かの改訂を通じて著しく変化していることが明らかになった。一次資料と中心とした分析を行うとともに、彼の指揮者としての活動を踏まえた考察を加え、管弦楽法の特徴の変遷のみならず、その背景にある変化の要因についても明らかにすることを試みた。

③管弦楽法研究の方法論についての根本的な議論を、コロキウムや受入教授との面談を通じて頻繁に行い、マーラーが行った修正や、マーラーの初期交響曲における管弦楽法の分類方法について整理した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣期間に得られた研究成果については、以下のとおり発表する予定となっている。

5. ①の研究内容は、2019年2月に一篇の独語論文にまとめ、学会誌に投稿・査読を通過し、現在掲載待ちの状況である。また、5. ②については、2019年9月にドイツ・パーダーボルンにて開催されるドイツ音楽学会の年次大会に口頭発表を申し込み、査読を通過、発表が決定している。発表後には、質疑応答などで得られたフィードバックを反映させ、内容を精査した上で学会誌への投稿を計画している。これらと並行し、派遣期間中から現在に至るまで、一篇の日本語論文を執筆中である。本プログラムを通じて得られた研究成果はすべて、博士論文の一部となる。

今後の研究計画としては、今回の研究成果のうちとりわけ5.②を発展させ、マーラーの初期交響曲の成立過程及び管弦楽法の特徴について分析し、博士論文執筆を進めることが第一に挙げられる。具体的には、管弦楽法を分析し記述するための方法論をより洗練させることに加え、対象とする一次資料の綿密な分析が挙げられる。並行して、ドイツ語・英語以外の先行研究も随時読解を進める。さらに、2020年度の夏季休暇には、北米(アメリカ・カナダ)に点在する重要な一次資料を調査する予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムを通じて得られたことは、大きく以下の3点にまとめられる。

1点目は、受入教授による指導である。派遣期間中はもちろんのこと、本プログラムの申請時から受入教授からメールを介した指導を受けることができた。指導をつうじて、国内では十分に議論することができなかった「管弦楽法」という研究対象を、いかに分析を通じて言語化するかということ、またその困難さおよび学術的意義を、派遣期間以前からいち早く認識できたことは非常に大きい。渡独後も頻繁に面談などによる指導を受け、博士論文完成に向けて多くの示唆を得ることができた。受入教授とは、今後も適宜研究上の議論を行うことになっている。

2点目は、派遣期間中に行ったドイツ語での論文執筆や研究発表およびそれにまつわる様々な実践的な技術である。論文完成までの過程において、受入教授からの指導のみならず、同僚からも論文執筆における基本的なアドバイスを頻繁に受けられたことで、自身の研究分野における日本語論文とは異なる論文構成法や、結論への導き方など、ドイツ語での論文執筆方法それ自体を学ぶことができた。また、コロキウムなどでの研究発表では、日本で行っていた研究発表とは異なる発表の内容や進行が求められた。こうした点は、今後日本語で論文を執筆する際、学会発表を行う際にも大いに活かしていく所存である。

3点目は、ドイツ語圏の研究者との交流である。学会や研究会などを通じて、研究分野を同じくするドイツ語圏の学生・研究者と知己を得ることができた。彼らとはすでにメールやビデオ会議による議論を行っており、研究対象に対する様々なアプローチを広く学ぶことができていた。こうした交流をつうじ、自身の研究をより洗練させるだけでなく、当該研究分野における自身の研究の位置づけや学術上意義を批判的再検討することが可能となることに加え、幅広い視野を身につけることが可能となった。こうした経験は、博士論文執筆のみならず、今後の自身の研究の発展に非常に役立つと思われる。